「まちをきれいに」を合言葉

市民力でゴミの落ちていない矢板市に

矢板中央高 野球部員

矢板中央高の野球部員が土・日曜の朝（午前八～九時）矢板駅周辺、長峰公園、学校周辺を清掃ボランティアで汗を流しています。監督の黒田先生、部員にお話を伺いました。

●部長　石山君（二年）

最初は「なんで掃除？」と疑問があったけれど続けているうちに、今まで気にもしないで歩いていたところもゴミに気づき、拾うようになった。視野が広がったことで、プレーの中でも先を読んだり、将来と野球との関わりをつなげて考えられるようになった。

今は、清掃作業を続けていることに誇りを持っている。

●副部長　斉藤君（二年）

最初は抵抗があったが「応援をしてもらう環境作りのため」と教えてもらってからやる気になった。今では、街がキレイになっていくのは嬉しいし、ゴミが落ちていると気になって拾うようになった。

●副部長　鈴木君（一年）

コーチの「ゴミを拾うことは一つの運を拾うことと同じ」の教えに従って、自分の地域の駅や街中のゴミも拾っている。チームの全員がそれぞれの地域で実践している。

●監督　黒田先生

生徒たちには清掃する意味を奥澤前監督の時から「自分の器を大きくしよう」「地域にも貢献して応援してもらおう」と話しています。部活をする意味は、野球がうまくなることだけではなく、人間関係を学んだり、人間形成と言う部分もあります。

将来、社会に出ていろいろな場所で活躍していってほしい。生徒は部活に夢や目標を持って入ってくるので、たとえ、その目標が達成できなくても、矢板中央高の野球部で頑張って良かったと思ってもらえるよう指導しています。

（記者のコメント）

矢板中央高の生徒はいろんな地域から来ているので、お世話になっている場所を中心に清掃作業をしています。市民の方とあいさつを交わしたり「頑張ってるね」と励まされているそうです。

（R・K）

●矢板駅前交番
高根沢巡査部長の話

駅周辺のごみ掃除、自転車の整備などをしてくれています。「何ができるか」ではなく、「できること」をしてくれていて、いろいろな地域から来ている生徒たちが、まさに、市長の言われる「市民力」を発揮していると思います。これを機に「拾うより落とさない汚さない」気運が広がってくれるといいですね。

生徒たちは、作業をしながら電車を降りてきた人にあいさつをしていますが、東京から来たおばあさんが「見ず知らずの私にあいさつしてくれるなんて気持ちのいい街だ」と喜んでいました。

矢板に来て二年になりますが、事件の発生も少ないし、街の中もキレイですね。

㈱小堀建設 職場改善委員会

㈱小堀建設では、毎朝始業前の三十分間、社員全員参加でまちをきれいにと清掃活動を行っています。

この活動は三十五年前から行われており、環境大臣や県、市からも表彰されました。中心となっている職場改善委員会の大貫さん、喜佐見さんにお話を伺いました。

●きっかけは？

当社は創業して四十二年になりますが、三十五年前から本社のまわり（ＪＲ東北本線西側から足利銀行交差点東側）の清掃活動を実施しています。

これは、創業者会長の理念である「ゴミが落ちているようなまちは発展しない。自分たちのまちをきれいにして、気持ちよく生活していこう」が原点で、現在も継続しています。

●清掃に対するメリットは？

まちをきれいにすることは、仕事の始まりに気持ちを整え、個々のメンタルを高めることができます。「今日も一日頑張ろう」という気持ちでやっています。

また、ご近所さんや散歩中の方、通学中の学生さんとも顔なじみとなり、自然にあいさつできることはうれしいですね。

●大変なことはありますか？

天気が良い日ばかりとは限りません。夏は暑く汗だくになりますし、冬は寒いので手がかじかんでしまいます。

また、秋は街路樹の葉が散るので大変です。袋がいっぱいになるほど拾って集めても、落ち葉は次から次へ落ちてきてしまうので、追いかけっこです…。

（記者のコメント）

長い期間、地道に行ってきたこの清掃活動が地域に定着し根付くというのは、やっぱり「継続は力なり」そのものですね。きれいなまちになると、みんながごみが落ちていれば拾おうという気持ちになるし、誰もが捨てなくなれば、よりきれいなまちになるでしょう。（M・W）